

## ←霞ヶ浦海軍航空隊

## 霞ヶ浦（その7）～練習航空隊～

1921（大正10）年に開隊した霞ヶ浦海軍航空隊はいわゆる練習航空隊で、日本海軍の航空教育の中核として、航空隊要員の操縦教育を担ってきました。「赤トンボ」の愛称で親しまれた複葉2人乗りの九三式中間練習機（前席が学生、後席が教官）によって操縦訓練が行われ、海軍兵学校や大学・高専出身の士官ばかりでなく、予科練出身者の多くもここで操縦を学んでいます。アジア太平洋戦争で勇戦奮闘した海軍航空隊の多くの搭乗員が、この霞ヶ浦航空隊から巣立っていきました。



## 霞ヶ浦海軍航空隊の組織と教育

1921（大正10）年6月、阿見原に「臨時海軍航空術講習部（センプル教育団）による講習を受講する被教育隊」が発足しました。7月には霞ヶ浦飛行場が完成、9月から翌1922（大正11）年10月までセンプル教育団による講習が行われ、講習が終了すると臨時海軍航空術講習部は廃止され、11月1日に霞ヶ浦海軍航空隊が開隊されました。霞ヶ浦海軍航空隊は横須賀海軍航空隊、佐世保海軍航空隊に次いで全国で3番目に開隊した航空隊で、横須賀海軍鎮守府の指揮下に海軍航空機の操縦教育と研究を行う部隊でした。部隊は、航空隊司令のもと、本部のほかに庶務・会計・通信・衛生・補給・教育・整備などの各課があつて、学生たちの操縦教育や整備教育等を支援していました。本部は現在の茨城大学農学部地に置かれ、陸上機の飛行場が本部周辺の阿見原に、水上機の基地が霞ヶ浦湖畔の青宿に設置され、日本最大の搭乗員教育部隊として、陸上機と水上機による操縦訓練を行っていました。

海軍の練習航空隊では、海軍兵学校出身者や、大学・高専出身の予備学生、予科練出身者が入隊して、それぞれ操縦・通信・整備・気象・写真などの教育を受けていました。卒業すると、操縦の場合には延長教育として、各機種等に応じた実用機の操縦訓練を受け、さらに、実戦部隊で実務に従事しながら技能向上をはかる教育システムになっていました。操縦専攻者の呼称は、海軍兵学校および大学・高専出身者などは「操縦学生」、予科練出身者（下士官出身者を含む）は「飛行練習生」と区別されていました。

## 大空へのあこがれ

1933（昭和8）年3月（中学32回）卒業の日辻常雄は、その著「最後の飛行艇（海軍飛行艇栄光の記録）」（光文社NF文庫）のなかで、飛行機乗りへの志望動機を次のように記しています。

『「オギャー」と産声をあげたのが大正3年（1914年）、茨城県の筑波山のふもと、霞ヶ浦に流れ込む桜川を囲む沃野一望の中の片田舎である。

海軍航空のメッカ霞ヶ浦から飛び立つ練習機の唯一の目標は筑波山（ヨロ・ソロ）である。この山に抱かれ、飛行機の爆音を聞きながら育ったのだから、大空へのあこがれが人一倍強くなったのは当然だろう。

ヨロ・ソロ…航海用語で、船を直進させることを意味する操舵号令。旧日本海軍および海上自衛隊では、転じて『了解』『その方向でよい』の意味で復唱される。「宜しく候（よろしくそうろう）」が変化したもの。

小高い丘の上の小学校（旧大形尋常小学校）に学び、裏にそそりたつ岩石の上に登って、遙かに霞ヶ浦航空隊のツエツペリン飛行船格納庫の大きな銀色の建物を眺めながら、虫のように飛び上がった飛行機が次第に近づいてくるのを待つのが何よりの楽しみであった。

土浦中学校に通学しはじめてからは、市内を闊歩する航空隊士官の姿が強く目にしみるようになっていた。昭和7年ごろ、毎日のように新聞紙上を賑わせる上海事変の海鷲の活躍、その大胆不敵の行動に心を躍らせるようになった中学4年のとき、『よし、おれは海兵に入ろう。若いうちに思う存分暴れ回ってパツと散ってしまいたい。それには飛行機乗りになることだ』という一風変わった考

えを、心の中に決め込んだのである。」

日辻は、1933（昭和8）年4月、応募者約600名中、採用150名という難関を突破して海軍兵学校（海兵64期）に入學。パイロット（飛行学生）を目指しました。しかし、飛行学生適性検査はさらに厳しいものでした（海兵64期150名のうち、飛行学生となったのは55名、うちパイロット30名、偵察（ナビゲーター・通信士などパイロット以外の搭乗員）25名でした。昔も今もパイロットへの道は難しいようです）。そのため日辻は、地の利を生かした秘策を考えました。海兵には夏冬2回の休暇が毎年あり、卒業までの都合8回の休暇中に霞ヶ浦海軍航空隊で体験飛行をさせてもらったのです。当時すでに日中戦争に入っており、航空隊も多忙でしたが、日辻は大歓迎され、見学に行くたびに、各飛行隊から体験飛行に引っぱり風にされました。各飛行隊では優秀な後輩を育てようとの思いと同時に、この生徒に一泡ふかせてやれという野次馬的歓迎の意もあつたのでしょう。体験飛行では青くなったり、酔っぱらったりしましたが、8回の体験を積んでいたため、海兵卒業ごろには操縦桿の動きと飛行機の姿勢ぐらいはよくわかるようになり、飛行学生適性検査合格に大きく貢献しました。

海兵を卒業後、待望の飛行学生となり、水上機専修学生として霞ヶ浦海軍航空隊、鹿島海軍航空隊（美浦村大山）で水上機の訓練を受け、飛行学生を終了。その後、館山海軍航空隊において実用機課程の教育を受け、舞鶴、佐世保の水上機部隊に勤務した後、1940（昭和15）年5月から南支（中国南部）沿岸作戦に従事。

アジア太平洋戦争が始まると、97式飛行艇や2式飛行艇(2式大艇)のパイロットとして、太平洋、インド洋方面の広大な戦域を駆け巡り、戦い抜いてきました。1945(昭和20)年8月、香川県詫間航空隊飛行隊長として終戦を迎え、米軍へ引き渡しのため、2式大艇を横浜まで空輸、これが日本の空を飛んだ旧帝国海軍最後の飛行艇となりました(この飛行艇は1980(昭和55)年7月に返還され、現在海上自衛隊鹿屋航空基地資料館に展示されています。日辻は戦後海上自衛隊に勤務、2式大艇の経験を生かして、新飛行艇PS-1の開発・製作に携わり、1968(昭和43)年に退職、1995(平成7)年他界されました。

### 山本五十六元帥と秋元梅峰老師

霞ヶ浦神社と土浦花火大会

日米開戦時に連合艦隊司令長官を勤めた山本五十六元帥(1884~1943)が、大佐時代の1924(大正13)年9月、霞ヶ浦航空隊副隊長兼航空学校教頭に着任しました(司令は安東昌喬少将)。山本大佐は航空機の操縦を学び、今後の国防の主力は航空機にあるとの確信を持ち、以後一貫して航空戦力の充実に尽力していきます。1925(大正14)年12月、駐米大使館付武官となり転出し、山本大佐の航空隊在任は1年3ヶ月でしたが、「天洋丸」に乗船して米国に向う山本大佐の頭上を、航空隊の部下たちが編隊を組んで見送りました。この部下たちが、飛行隊長としてハワイ真珠湾攻撃の先陣を切ることになりました。

しかし当時の航空機は開発途上で性能が安定せず、整備技術も未熟で、安全

性に問題がありました。このため事故が頻発し、横須賀海軍航空隊が発足した1915(大正4)年からの約10年間で、事故による殉職者は全国で60余名、霞ヶ浦海軍航空隊だけでも25名の殉職者が出ていました。山本大佐は事故防止のため、研究、調査を命じました。事故を分析、事故原因を徹底的に究明し、航空機飛行実施規定を作成させたのです。同時に航空殉職者の慰霊のための神社建設を提案、実現に努めました。1925(大正14)年1月、山本大佐を委員長とする霞ヶ浦神社建設調査委員会が設立されると、全国海軍航空関係者から浄財が寄せられ、霞ヶ浦海軍航空隊員の労力奉仕で建設が進められました。翌1926(大正15)年2月1日、航空隊本部近くに霞ヶ浦神社が建立され、全国の海軍航空隊殉職者60余名の英霊が祀られました。



霞ヶ浦神社社殿(現阿彌神社境内)と海軍航空殉職者慰霊塔(中郷保育所前)



現在、茨城大学農学部本部地区の北側樹林のなかに、神殿を固定したコンクリート造りの基礎が残っており、社殿は阿

見町中郷の阿彌神社境内に移されています(ご神体の5.573柱の霊名録は中郷保育所の隣接地にある海軍航空殉職者慰霊碑に納められています)。

山本大佐は、霞ヶ浦海軍航空隊在任当時、土浦市文京町の神龍寺山門近くに下宿していました。そのため、神龍寺24代住職秋元梅峰老師(中学1回卒)と親交を深め、航空隊殉職者に対する供養や慰霊についても相談をしたようです。その話を受けた秋元老師は、慰霊のために土浦では花火大会を開催し、同時に供養の法要を営むことになりました(1879年に始まり、1906年から本格的な花火大会になっていた長岡の花火を山本大佐から聞いて、それがヒントになったのかもしれない)。

時期は農家の収穫が終わる晩秋とし、航空隊殉職者の慰霊とともに、農民の慰安と関東大震災後の不況で疲弊した土浦の経済を活性化するという趣旨で、1925(大正14)年9月、霞ヶ浦湖畔の岡本埋立地(現川口運動公園付近)で最初の大会の花火が打ち上げられました。当初、秋元老師は私財を投じて運営に当たっていましたが、4回目からは「土浦煙火協会」が設立され、大会を主催するようになりました。途中、第二次世界大戦による中断がありました。1946(昭和21)年9月に第14回大会として、戦後いち早く復活し、本年第83回目を迎えました。

ところで、秋元老師は1882(明治15)年生まれ。1902(明治35)年3月、旧制土浦中学卒業後、日露戦争に従軍、20才代半ばで神龍寺住職となり、宗教活動、慈善活動に情熱を傾けました。1912(大正元)年「筑南慈済会」を結成し、受刑

者の更生保護施設を寺院内に開き、翌1913(大正2)年には「大日本仏教護国団」を設立、布教伝道と貧民救済に当たっています。1923(大正12)年の関東大震災の時には避難民を救済するため、寺院を開放して不眠不休で、宿泊、炊き出し、施療を行い、二千数百名を救済したといわれます。こうした慈善事業のために借財が重なりましたが、秋元老師はそれでも社会奉仕のために休むことがありませんでした。しかし、その過労からか1934(昭和9年)7月9日、講演中に倒れ、急逝されました。

秋元老師の3回忌に当たり、老師の恩を受けた人々の手で銅像が建てられました。この除幕式の時、老師の霊前には、老師が社会事業のために借りた資金3万円の借用証文も奉納されました。あちこちに債務が残っているのは申し訳ない、債権者たちが自発的に借用証書を老師の霊前に捧げたのです。



神龍寺境内にある霞ヶ浦海軍航空隊航空殉職者供養塔と秋元梅峰老師銅像

参考「阿見と子科練くそして人々のもの(高21回 松井泰寿)たり」阿見町